



青のゆるる館

Ao no Yukuru Kan

Keramashoto National Park

Visitor Center

Ao no Yukuru Kan

青のゆるる館

Keramashoto National Park

Visitor Center



Ministry of the Environment

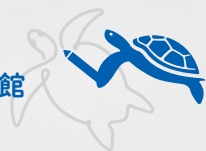
National
Parks
of Japan



Welcome to

Ao no Yukuru-Kan

青のゆるる館



もくじ

Introduction 施設について 02

施設名称

シンボル

館内マップ

- 総合案内

- 展示

Omoi 想い 13

設計・制作・建築に携わった7名の想い

Irodori 彩り 21

青のゆるる館を彩るもの

Naming 施設名称

青のゆるる館

ケラマブルーを表す「青」

島での時間をゆっくりくつろいで過ごしてほしいという
想いを込めて「ゆるる」

慶良間諸島を象徴する美しい海「ケラマブルー」。そして、海中や島々に生息する生きものたちや、そこに住む人々がつくりあげてきた歴史や文化。

こうした多様な魅力への気づきと新たな発見が得られること、そして、自然環境を守る・未来へ継承する大切さへの共感と行動を広げていくことを目的として建てられた施設です。訪れた方々がゆっくりとした時間を過ごし、「ケラマブルーの世界」をより満喫できるきっかけを得られる場所であるように、という想いから「青のゆるる館」と名づけられました。

Symbol シンボル



「サンゴに寄り添うウミガメ」

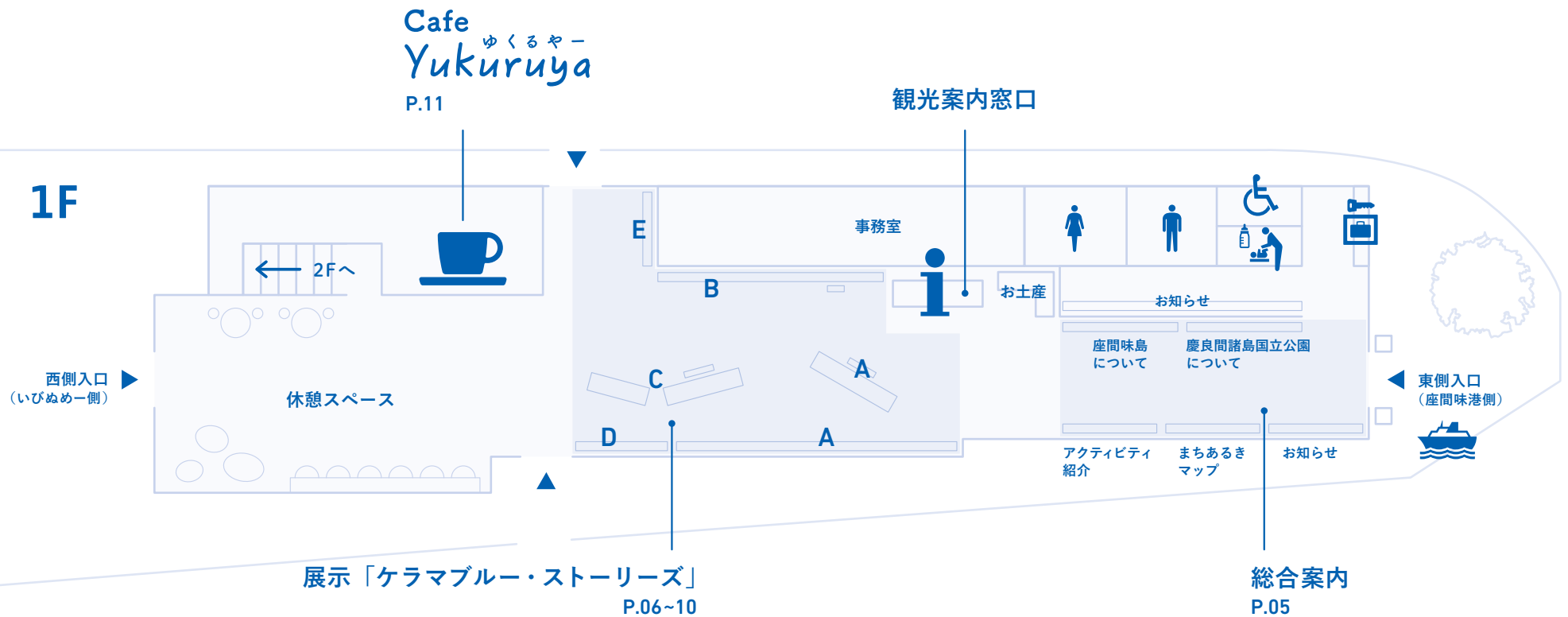
ケラマブルーを生み出すサンゴとそこに集まる生態系の営みを表現しています。ウミガメがサンゴを大切に抱きかかえるモチーフとすることで、青のゆるる館の利用を通して、自然への興味・理解が深まり、保全への行動につながることを意図しています。

Map 館内マップ



展示「ケラマブルー・ストーリーズ」

- A ケラマブルーのひみつ P.06
- B 慶良間諸島に集う生きものたち P.07
- C サンゴ礁につつまれた多島美 P.08
- D 慶良間の海と生きる人々 P.09
- E 曆とともに生きる島の人々 P.10



Information 総合案内

東側入口の魔除けのシーサーの間を抜け、館内に入ってすぐ左右にあるのは、慶良間諸島国立公園に関する総合案内です。

国立公園内にある島々の紹介、利用ルール、当日の船やバスの時刻表が見られます。また、「座間味島ガイドンス」にある展望台紹介やビーチに関する情報は、おでかけの計画に役立ちます。



せっかく座間味島に訪れたなら、集落散策やガイド付きアクティビティもおおすすめです。ジャンル別に整理された「まちあるきマップ」や、多様なアクティビティを紹介しているデジタルサイネージから、ヒントを探してみましょう。

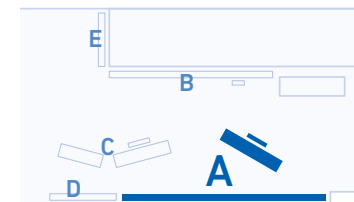
窓口ではきめ細やかな観光案内を行っています。パンフレットも多数ありますので、気軽にお立ち寄りください。また、慶良間諸島国立公園・青のゆる館ならではのみやげも販売しています。

Exhibition 展示

展示エリアは、慶良間諸島国立公園の魅力や価値にふれられるよう設計されています。「美ら海慶良間-海と島がつくるケラマブルーの世界」というテーマに沿って分けられた、AからEの5つのストーリーをお楽しみください。

展示を見た後には、目の前に広がる慶良間諸島の自然がより色濃く、生きものたちの息づかいをより身近に感じられることでしょう。

ケラマブルーのひみつ



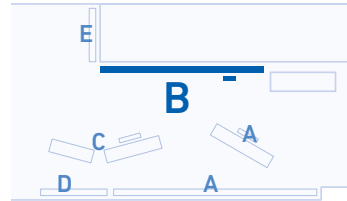
「ケラマブルー」と呼ばれるこの青く美しい海のひみつを、一緒に解き明かしてみませんか。このストーリーを見れば、「どうして海は青いの?」「サンゴって何?」という質問に答えられるようになり、サンゴ礁周辺で見かける海の生きものたちの名前がわかるようになるかもしれません。

また、世界に一式しかない「12K360度VR水中撮影システム」によって撮影された映像は、思わずのけぞってしまうほどの臨場感があり、色彩豊かな景観やダイナミックな魚たちの動きは圧巻です。パネルを操作していろいろな場所を探検してみましょう。

世界で唯一の
12K360度水中カメラで撮影された
“ケラマブルーの世界”を体感!!

B

慶良間諸島に集う生きものたち



慶良間諸島国立公園には、海域・陸域ともに多くの希少な生きものたちが生息しています。

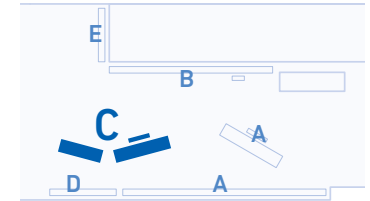
周辺に注意を払うと、ビーチには小さなヤドカリの足跡が見られ、耳を澄ませば季節や時間によってさまざまな野鳥の声が響き、散策時には道路わきの茂みからカサカサと生きものの動いている音が聞こえてきます。

このストーリーでは、四季折々さまざまな場所で見られる生きものたちの生息環境や生態などをパネルで紹介しており、空・陸・海をテーマに撮影した生きもの21種の映像を大型モニターで楽しめます。



C

サンゴ礁につつまれた多島美



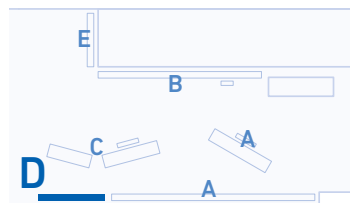
海とそこに浮かぶ大小30余りの島々は、急激に深くなる海底地形、自然豊かなサンゴ礁、白い砂浜、切り立った崖と広がる草地、風が強い日でも波が落ち着いている湾内など、さまざまな表情を見せてくれます。これらの景観はどのように生み出されたのでしょうか。

このストーリーでは、慶良間諸島の成り立ちや目の前の景観に秘められたエピソードを紹介しており、その魅力を迫力ある映像でご覧いただけます。また、慶良間諸島を形づくる岩石にも実際にふれられます。



D

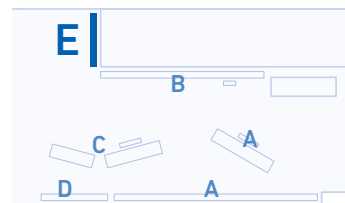
慶良間の海と生きる人々



うみんちゅ

海人としての活躍、建材や食べ物としての恵み、そして現代における観光産業など、慶良間の人々と海との関わりは時代によって変化してきました。ただ、どの時代においても、人々は海に対する敬意を忘れずに受け継いできており、今でも海に関する伝統行事などが行われています。

このストーリーでは、進貢船のレプリカや昔の道具など複数の展示物から、当時の様子的一端をうかがい知ることができます。海で遊ぶだけでは知ることができない慶良間の海と人々の歴史に、少しだけ想いを馳せてみてはいかがでしょうか。



E

暦とともに生きる島の人々

沖縄には古くからの伝統行事や文化が数多く残っていると言われてますが、ここ座間味島でも、人々は季節のうつろいや月の満ち欠けなど、自然の変化とともに生活を営んでいます。

さまざまな角度から切り取られた暮らしの様子や集落で見られる風景などの写真とともに、季節ごとに見られる生きものなどを取り上げています。

どの季節も魅力あふれる座間味島。それぞれの良さや魅力にふれられるよう、ぜひ季節ごとに足を運んでみて、あなただけのお気に入りの季節・場所・生きものを見つけてみてください。





カフェ ゆくるやーでは、コーヒーやハイビスカスジュース、サーターアンダギーなどを販売しています。

コーヒーで一息つきながら港を眺めたり、用意してあるさまざまなジャンルの本を読んだりして、ゆったりとした時間をお過ごしください。

*アルコール類の持ち込みはお断りしております。



2階の休憩スペースには、観光関係の雑誌、動物や植物の図鑑、絵本、沖縄の文化や建築に関する専門書など、多種多様な本をご用意しております。

*館内でのみ閲覧いただけます。お持ち帰りはご遠慮ください。



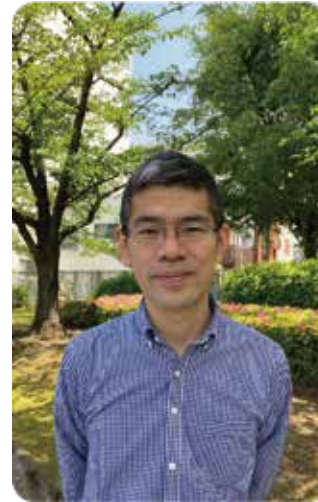
Omoi

想い

設計・制作・建築に携わった7名の想い

- 01 建築設計 河合 洋平
- 02 造園設計 八色 宏昌
- 03 シンボル・サインデザイン 鎌田 博美
- 04 映像制作 賛田 竜矢
- 05 映像制作 大上 祐司
- 06 展示制作 (株)ツムラエンタープライズ
(株)つむら工芸
- 07 建築工事 宇野 貞治

01



建築設計

合同会社わくわくデザイン

河合 洋平



「世界水準の持続可能な国立公園」の実現のために、「リトリート」と「サンゴ礁等の自然環境保全」の両立を支える滞在型の利用拠点をつくる、というのが計画の始まりでした。

本施設は、行動のきっかけを与え、第二のわが家のようにリラックスし国立公園の満喫をサポートするリトリートな空間づくりを目指しました。来島者にとっては島の暮らしの空気感が感じられる場に、地元の方には気軽に立ち寄れてホッとできる場になればと思っています。

外観は座間味島の正面景観となるように琉球石灰岩漆喰模様の赤瓦葺きです。軒先の巴は座間味の海をイメージした絵柄です。異なる絵柄が2か所ありますので探してみてください。

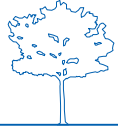
インテリアは座間味の自然をイメージしました。案内カウンターは砂浜をイメージした琉球石灰岩張り、カフェカウンターは地層をイメージした木板張り、ケラマブルーの透明な海をイメージした琉球ガラスの照明、座間味の自然をイメージした藍染ボーダーライト・藍染の暖簾です。案内カウンターの背面、カフェカウンターの柱・メニューボードは黒板塗装仕上げです。活き活きとしたメッセージを発信していただき、座間味らしさを吹き込んでいただければと思います。

02

造園設計

景域計画 株式会社

八色 宏昌



青のゆるる館では、敷地計画、展示、ランドスケープの設計と工事監理に携わりました。座間味島はサンゴが育む豊かな海や亜熱帯植生が育む陸域のすばらしい自然に恵まれた島です。

ランドスケープの設計では、島の自然を大切に、集落との調和を心掛けました。具体的には、集落内に見られる琉球石灰岩を石積みやサインに使用したり、慶良間諸島の砂岩を景石として用いたり、島内の残土内のサンゴの破片を選別・洗浄してマルチング材として使用しています。

植栽は、他の地域から動植物が持ち込まれないように、調達は大変でしたが、土壌も含めてすべて島内産のものとししました。植物はエントランスのモモタマナ、中低木にはオオバギ、カラヒメツゲ、クサトベラ等、地被類はゲットウ、ヒメキランソウ等を植栽しています。また、室内のプランターには、オオタニワタリやクワズイモ等を植栽しています。生産された植物ではないため、少量で形状はさまざまですが、島の皆様に見守られ、成長していくことを楽しみにしています。

植物をご提供頂いた島内の皆様、調査から工事まで長期にわたってお世話になった島内の皆様、関係者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

*ランドスケープ=景観

03

シンボル・サインデザイン

株式会社 GK 設計

鎌田 博美



ウミガメとサンゴからなる施設のシンボルマークと、それを展開したサイン（施設の案内を担う、入口の館名表示や施設内の案内表示等）を担当しました。

シンボルは、島の皆さまや利用者に親しんでいただけるよう、慶良間の代表的な生きものでもあるカメがモチーフとして選ばれ、外形をシンプルな丸におさめることで記憶に残りやすいデザインとしています。よく見ると、カメの目はまん丸ではなく少し歪んだ形をしています。愛らしい表情だけではなく、自然の中で生きる生きものとしての強さを表現できればと思いました。

サインについては、分かりやすさを大切にしながらも、よく探すと小さな発見があったり、新たな気づきがあるように細かな仕掛けをしています。ケラマブルーのようなキラキラした素材感、シンボルマークに紛れ込むカメ、伸びる魚などなど、ゆっくり探してみてください。

慶良間を訪れる度、季節や時間ごとに新たな発見や出会いに溢れています。ちょっと立ち止まる、耳を澄ます、地面を覗き込む...、自分で新しい何かに気づく喜びは大きく、この施設がそんな過ごし方のきっかけにもなればと思います。

今後も青のゆるる館が、皆さまに親しまれ愛される場所になることを心から願っています。

04



映像制作

株式会社 千代田ラフト
 贄田 竜矢



慶良間の自然の映像コンテンツを作る上で、私が最も大切にしたのは豊かな島々の自然を知ってもらいたいという想いです。

慶良間には「どんな自然があり、どんな生き物が生息しているのか」図鑑をめくるように見ていくのではなく、「多種多様な生き物が慶良間の自然をどう利用して生きているのか」出来る限りドラマティックに伝えられるよう、制作に望みました。

撮影を続ける中で、私が意識したことは常に疑問を持ち続けるということです。

「なぜあの魚はサンゴの陰に隠れているんだろう」「なぜ魚同士がケンカしているんだろう」など、その疑問を解き明かすように撮影を進めていきました。

カメラに映し出される生き物の行動には必ず理由があります。

その理由を想像し、生態や習性などの知識を得ることで、そこにドラマが見えてくるのです。

自然にはまだまだ私達が知らない謎があふれています。

皆さんもダイビング中や散策中、些細な発見でも疑問を持ち、それを紐解いていくときっと慶良間の自然を深く楽しむことが出来ると思います。

私達が制作した映像が、そんな楽しみのきっかけになればと心より願っています。

05



映像制作

株式会社 NHKエンタープライズ
 大上 祐司

初めて降り立った座間味島の衝撃は今でも忘れることができません。

慶良間ブルーとはこのことか…とワクワクするとともに「この美しさを映像でどう伝えるのか?」という責任の重さを感じました。

NHKエンタープライズではNHK「ダーウィンが来た!」など数多くの自然番組を制作しています。今回、これらを手掛ける自然映像制作に特化したチームを組み、四季を通じて海中から空や森まで、慶良間諸島の自然景観や、生きものたちの生命力を余すところなく撮影しました。

中でも注目は世界に1台しかない12K360°水中カメラで撮影したダイビングVR映像です。手元の操作パネルで視線を変えながら進んでいくと、まるで本当にダイビングしているような没入感が味わえると思います。是非体験してみてください。

最後に、個人的にお気に入りの生きもの映像はケラマサワガニです。

普段は見過ごしてしまいそうな小さな命ですが、この島々に暮らす生きもたちはとても貴重です。「足元には生命の小宇宙が広がっているんだ」ということが見えてくる映像だと思います。

多くの人たちにそれぞれの感じ方でこの「青のゆるる館」の展示映像作品を楽しんでいただければ幸いです。

06

展示制作

株式会社 ツムラエンタープライズ 佐藤 敏樹

株式会社 つむら工芸 藤村 克己 牧 貢平

田代 詩奈 金沢 侑人



私たちは、主に展示制作を担当しました。

情報の正確さ、伝わりやすさ、興味をひく創意工夫など、多くの時間と議論を重ねて展示物をつくりあげてきました。特に注力したのは「レプリカ」作りです。

ストーリーBの「オカヤドカリ」は体の色味が部位によって変化していくので、図鑑や動画をじっくり何度も観察して色づけしました。仕上げの体毛も、生える部分や毛束の繊細な部分にこだわっているため、ぜひレプリカを参考にして実物を探してみてください。「ケラマトカゲモドキ」は体つきが一般的なトカゲと大きく違いはないので、特徴的な部分をわかりやすく見せるために、柄や皮膚の質感の再現に力を入れています。ストーリーDの「進貢船」は資料写真や既存の模型を参考にしながら、帆のロープのかけ方などディテールにこだわりました。特に船尾の絵は非常に細かい部分まで手描きで仕上げています。2階のミニギャラリーにあるサバニ船は使い込んだような風合いを、アジサシのデコイは特徴的なぼったりとした胴体と長めのクチバシを再現するよう心がけました。

これらが皆さんの目に触れ、少しでも生きものや文化への興味関心を持つきっかけになれば大変嬉しく思います。

07



建築工事

株式会社 福地組

宇野 貞治



私は、青のゆる館の建築工事を担当しました。

青のゆる館は、座間味島で、人通りの多い交差点に位置し、バスの通行もあり、近隣住民の皆様の安全を一番に、現場管理を行いました。

本建物は、鉄筋コンクリート造2階建て、一部木造小屋組の混構造こんこうぞうとなっております。天井の梁は屋根を支える構造体でありながら、デザイン的にも1,2階と異なる雰囲気を出す、意匠的な役割も担っています。

本建物には、沖縄の特色である琉球石灰岩を各所で使用しており、沖縄のイメージを表現しております。また、屋根瓦は、琉球石灰岩漆喰模様の赤瓦葺きで、茨城県の業者さんが、風に強いポリフォーム接着で施工を行っております。屋根瓦の軒先瓦には、座間味島をイメージする、かつおの図柄を採用しております。また、その図柄の一部に座間味島に関連する生き物が混ざっていますので、探してみてください。

今回、私自身、離島での現場が初めての経験でした。資材の搬入や、職人の渡航・宿泊計画が、海上時化の為のフェリー欠航で変更となり、工程管理で、大変な面もありました。ですが、現地の民宿や、近隣の皆様のご理解とご協力のおかげで、完成を迎える事が出来ました。島民の皆様、有難うございました。

Irodori
彩り

青のゆる館を彩るもの
それぞれに込められた想い



「カツオ」が跳ねている軒先の瓦

小林瓦工業株式会社

小林 宣夫

座間味港から降り立つと、目の前には、赤と白のコントラストが美しい屋根が目の前に見られます。この屋根は新開発の「美ら瓦」が葺かれています。

この瓦は琉球瓦を模した、一体型の瓦にて、白い箇所は釉薬を焼き付けることにより、琉球漆喰の意匠を再現しております。焼き付けていることにより従来の漆喰の劣化の恐れ無く、長く美しい意匠が続きます。瓦1枚、1枚はポリフォーム工法により接着されており、強風に対しても強い屋根となっています。

屋根を見上げると、軒先の瓦の丸い所には「カツオ」が跳ねています。

これは慶良間諸島が沖縄県においてカツオ漁業の発祥の地にて、大きく発展していたことによりシンボルとして採用されています。

実は軒先の瓦の中には、他の生物が隠れています。皆さんも屋根を見上げて探してみましよう。

からんしゃ
花藍舎

宮良 千加



私はうるま市勝連城跡ふもとの集落に花藍舎という工房を構え、琉球藍と草木で糸を染め、暮らしを彩る手織の布を織っています。昨年、青のゆる館の布製作をご依頼いただき、まずは座間味島を知るべく来島いたしました。

座間味島の自然の美しさは想像をはるかに超えるものでした。

高月山展望台から見晴らすと、入江が入り組みながらも海は透き通った青色が何層にも重なり、空の青と木々の緑も相まって、それはそれは美しいパノラマが広がっていました。夕刻には青の世界が紫がかかった茜色に変わり、優しい光を放ちながら太陽が沈んでいく。その夜は偶然にも中秋の名月。浜辺で波の音を聞きながら、月の光を映す水面（みなも）のゆらぎに時を忘れました。



23

私は座間味島の鮮やかながらも優しい自然の色彩を、透明感のある藍の色をベースに、ていばなという伝統の花織技法を用いて布を織ることにしました。

1階 暖簾のタイトルは「月の道」夜の海に映る月の光を表現しました。

2階 ボーダーライトのタイトルは「座間味讃歌」

ピンクのゾーンは太陽の世界。マカイ（お椀）は豊食を祈るモチーフ。青のゾーンは海の世界。魚は大漁やマリンレジャーのシンボル。緑のゾーンは大地の世界。亀は長寿を祈るモチーフ。

青のゆる館を訪れる島の方々や観光客の皆さんが、見上げてほっこり笑顔になって下さればとの思いを込めて織りました。

底知れない魅力に満ち溢れた座間味島が、ますます繁栄されることを願います。



2階 ボーダーライト「座間味讃歌」



1階 暖簾「月の道」

24

琉球玩具製作所 こくら

五月の節句の縁起物である「鯉乗童子」や「鳩」など、
沖縄で古くから愛されてきた子ども向けの玩具。



やちむんや

家の屋根や門前に設置される守り神のシーサー。
顔の表情、毛の一本一本、焼き色
全てに想いをこめ丁寧に作られている。



吹きガラス工房 彩砂

厚み・丸みのある形と含まれた泡の粒がやわらか
い光をもたらす、琉球ガラスのランプシェード。



グラスアート藍

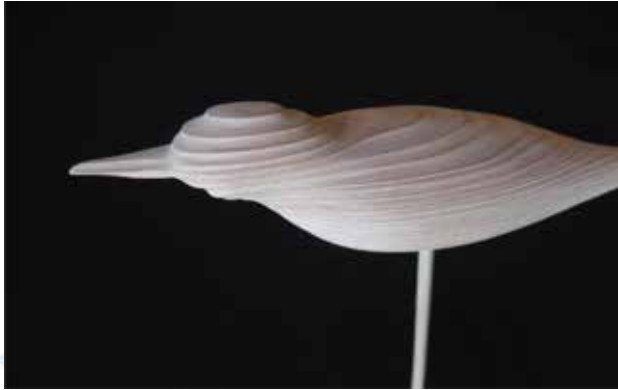
幸運を届けてくれる
「リュウキュウアオバト」がモチーフ。



ベニアジサシのデコイ

公園内の渡嘉敷村慶伊瀬島(通称チービシ)は鳥類の重要な生息地であり、県の鳥獣保護区に指定されている。

ストーリーBの映像ではアジサシ類の繁殖について紹介。



ブダイの歯

ブダイの仲間は、強力な顎と歯をしている。エサとなる藻類をサンゴの骨格ごと鋭い歯でかじりとり、さらに喉にある歯でも、細かくすりつぶす。こうして砕かれたサンゴは、波に打ち寄せられ、ビーチの白い砂になってゆく。

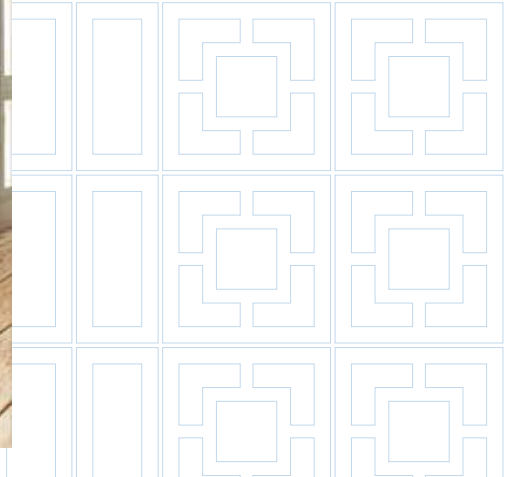


サバニ

沖縄で古くから使われていた木造の漁船。2000年からは座間味島の古座間味ビーチを出発し那覇港を目指すサバニ帆漕レースが行われており、数十ものサバニが競い合う様子が見られる。



花ブロック コンクリートブロックに空洞を作って柄をデザインした、沖縄生まれの建築素材。強い日射しを遮る一方で、穴から柔らかい光と風を取り入れられるようになっている。



琉球石灰岩

サンゴや貝殻などが堆積することによりできた岩。多孔質で保湿性・通気性に優れている。



Details 施設詳細

施設概要

設置者 : 環境省 (沖縄奄美自然環境事務所・慶良間自然保護官事務所)

施設名称 : 青のゆるる館

所在地 : 沖縄県座間味村座間味集落内

構造 : RC造一部木造2階建て

(敷地面積645.89㎡/延床面積493.60㎡)

管理・運営体制

開館日 : 通年 (臨時休館有)

開館時間 : 9:00 ~ 17:00

運営 : 一般社団法人座間味村観光協会

